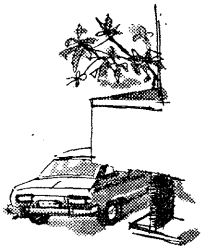
ヨーロッパの旅（七）

平井信義



パリーには、子どもたちが集まっている場所がいくつもある。そこに行けば、子どもたちが嬉々として遊んでいる姿を、まのあたり見ることができる。幾度も訪れたこのパリーであるが、そのたびに私の足の歩みは、どうしてもそれらの場所に向いている。

シャイヨー宮の前の広い石畳では、いつ来ても、子どもたちがローラースケートを楽しんでいた。シャイヨー宮を左手に坂をおりると小さいながらも幾つかの遊園地があり、比較的年少な子どもが砂で遊んでいた。ルクサンブール公園も、特にその中央にある池は、子どもたちにとっては格好の遊び場であり、土曜日や日曜日などには、おもちゃのヨットやボートが右往左往していた。また広大なブーローニュの森にも、何組もの子ども連れの家族が、たむろしているのであった。

メトロ（地下鉄）から這い出るようにのぼりつめてみると、きょうもまた、秋晴の空の下に、シャイヨー宮の大理石の石畳が、まぶしいばかりに輝いていた。ここからは、全く正面切って眺めることができるし、アンヴァリッド（廃兵院）まで続く庭園がひらけている。更にその奥には、パリーの屋根が波打つようにひろがり、その中にマドレーヌ寺院やその他の巨大な建物がそそり立っているのが見える。

ここに来ると、私はいつも石畳の一角に腰をおろして疲れを休める。そして、すでに百年以上も前に、よくもこのような規模の大きな庭園を計画したものであろうかと、その大きな計画に感服してしまう。この庭園ばかりではない。シャンゼリーゼの大通りにしても、ブーローニュの森にしても、実に規模が大きい。小さ

なからだの人間が、大規模な構想を持つに至った動機はどこにあるのだろうか？　またこのような構想は誰が考え出したのであろうか？　日本人にこうした大がかりな構想がなかったのはどうしてであろうか？　石畳にすわるたびに、同じようなことを頭にうかべ、その辺の事情についての歴史を勉強しておこうと思う。そう思いながら、十六、七年の月日が流れてしまった。

石畳の上でローラースケートを楽しんでいる子どもたちは滑車の音を立てながら、私の目の前を何回となく通り抜けていく。彼らは、エッフェル塔を見上げるでもなく、広大な庭園を見下ろすでもなく、ひたすらにスケートを楽しんでいる。何回も何回もぐるぐると石畳の上をまわっている。疲れてくると、しばらく石段に腰をおろす。おろしたかと思うと再びまわり始める。幾組かの家族連れで来ているのがあった。サングラスをかけた母親が、秋の陽射しをいっぱいに受けながら、本を読んでいる姿が反対側の石の縁の上に見える。時々は子どもたちの動きに目をやるが、むしろ、読書を楽しんでいる風情である。一人の男の子が近づいて何か声をかけると、その母親は、籠の中から魔法瓶を取り出して、そのふたに飲みものを注いでいた。大きなふたに口をつけて、それをひと息に飲みほした子どもは、再び元気を取り戻したかのように滑り始める。入れ替えに、大柄な他の男の子が、滑車をすべらせたままの勢いで母親に近づく、その子にも、飲み物を与える。飲みほすのを表情もかえずに見ていた母親は、その子が滑り去ると、再び本に目を落とすのであった。

前に来た時には何十人かの子どもたちが右に左にと滑っていて、壮観だったこともある。二〜三歳の小さい女の子が、こわごわ滑っていることもあった。後髪にリボンをつけた四〜五年生ぐらいの女の子が、前後左右に巧みな滑走をしているのを見たこともある。それが十六年前であったり、五年前であったりしたから、その子どもたちはすでにおとなになっていたり思春期になっていたりしているはずである。そうした子どもたちは、いま何をしているのだろうか？　自分たちのことが日本の児童研究者の記憶に残っているなどとは、全く思ってもいないことであろう。あるいは、ローラースケートを楽しんだことさえも忘れているのかも知れない。そうした子どもたちのことが、姿が、あるいは顔が、いま、私の脳裡によみがえってくること自体が不思議にも思えてくるのである。そして、いまスケートを楽しんいる子どもたちのことも、また何年も先の私の思い出となるであろう。

シャイヨー宮から左の石段を幾段もおり切ったところに、広い自動車道路があり、そこはかなり交通が頻繁である。その道路に白いペンキで横断歩道が描かれている。それを渡ろうか渡るまい

かと私が思案をしていたその時に、さっとローラスケートにのった男の子が私の横に飛び出してきて、急停車した。それは、石段ぞいに傾斜してさがってくるコンクリートの上をスケートで滑りおりてきたのであった。歩道を飛び出せば、走ってくる自動車にぶつかってしまうかも知れない。危険な遊びをするなーと思ってみていると、四〜五人の男の子が、同じ傾斜の石の上を次々と滑りおりてきて、最後のところで一メートルほどジャンプして歩道におり、急にブレーキをかけるのであった。大冒険である。そのようにして五人の子どもたちが集まると、スケートをつけたまま石段を逆にのぼっていき、再び滑走に移った。一人、二人――とかなりのスピードがでる。

その時、石段の上の方から、警察官がおりてきた。パリーの警察官は、背も高く、なかなかスマートであるから目立つ。恐らく、子どもたちの危険な遊びを見つけ、それを咎めにおりてきたにちがいない。私は、どのような光景が展開されるかと見守っていた。日本であれば、おっとり刀という姿でかけおりてくるだろう。その姿を見つけた子どもたちは、一目散に逃げ出すかも知れない。ところが、スマートな警察官はゆっくりゆっくりした足取りである。むしろぶらぶらと歩いているという感じで、一段一段階段をおりてくるのである。子どもたちもまた、別に急いで身の処し方を決めるようすもなく、四人目、五人目と滑りおりてきて全部が揃ったところで何か話し合っている。何を話しているのかわからないが、相談し合っているようすでもある。

何十秒か過ぎた。ゆっくりとおりてきた警察官ではあったが、子どもたちに近づいて、子どもたちの側に立って見下ろすと、何かふたこと三ことしゃべった。男の子たちは、その言葉を見上げるようにしてきいていたが、何も言わずにきいている風情である。そして話が終わるとすぐに一列になって歩道を向こうへと滑り去っていったのであった。何ということもない。全く自然のなりゆきであった。どんな言葉で警察官が話したのかは、全くわからないが、決して荒い言葉づかいではなかった。また、その表情にもいかめしさがなかった。子どもたちの表情にも、特別な恐れとか不安とが現われてはいなかったのである。いったい、これはどう考えたらよいのであろうか、パリーに住んでいる友人にきいてみると、彼が交通違反で取締を受けた時にも、警察官は怒ったような表情をせずに、違反の点をはっきりと指摘したということである。

ルーブル博物館の中庭で見た光景も忘れない。垣根で仕切られた芝地があり、そこはデートの場所でもあるらしく、三〜四組の

若い男女がからだを寄せ合っていたが、ちょうど芝生を越えた東側に三勇士の立像が並んでいるのが見えた。それは鋼鉄で作られているのか、青光りがしていた。その時、その前の芝生で遊んでいた五〜六人の子どもたちが、その立像によじ登り出したのである。小学校四、五年の女の子もいれば、まだ幼児期にあるらしい男の子もいる。真先に登った女の子が、ちょうど肩車でもするかのように立像の首にまたがると、もう一人の男の子は他の像の頭にしがみつく。他の子どもたちもそれに負けじとよじ登る。

その時、一人の警察官が足早に、垣根の入口から入ってきた。私は、子どもたちのいたずらをとめにやって来たのだと直観して、どうなることかと見守ったのである。ところが、その警察官は、子どもたちの方を見たのか見なかったのか、よくわからない。そのままの足取りで、別の出口から姿を消してしまったのである。もちろん、子どもたちの姿が目に入らないはずはなかった。しかしそこには、何事も起こらなかったのである。いったいこれもどういうわけなのであろうか。この光景については誰にもきかないでしまった。どうにもはっきりとした理由はわからない光景である。

シャイヨー宮の左手には、マロニエの林が続いている。五年前に家内といっしょに来たとき、ここで三個のマロニエの実を拾い、そのつやの美しさとふくよかな丸味にひかれて、日本に持ち帰って植えたが、遂に芽を出すことがなくて終わった。今回も九月の半ばを過ぎていたから、あるいは幾つかの実が見つかるかと思って探したが、見当たらなかった。子どもたちが拾ってしまったのであろうか。おおぜいの子どもたちが来ており、土の肌が見えるところで思い思いの遊びを楽しんでいた。ちょうど木曜日である。木曜日はいつも学校が休みの日になっているのを思い出した。砂場で山を築いたり、木製のシャベルで穴をほっている子どももいる。おもちゃが点々ところがっているそばで、追いかけっこをしている二〜三人の子どももいる。鉄製の柱から出ている蛇口に口をつけて水を飲んでいる子どもに、そばから水をはねかしている子どももいた。どこの国にも共通な子どもの姿であった。

子どもたちが遊んでいる幾つかの小さな広場の垣根寄りには、ベンチがふたつ三つ並べられてあるが、そこには母親らしい人が腰をおろして、あるいは本を読み、あるいは編物などをしていた。時々は子どもたちの遊びに目をやるが、それも全く想い出したようーといった感じで、むしろ自分のしていることに精を出しているといった方がよい。すわっている近くにうば車をおいて、赤ん坊に陽射しを当てている光景も見られたが、その母親もまた

熱心に読書をしていた。私もしばらくそれらのようすを見ていたが、母親が干渉がましい声をかける（ただの一回も）のを見ることはできなかった。よいか悪いかの判断はできないけれども、子どもは子ども、自分は自分――といった風情がそこには漂っていた。

小道をゆるゆると歩いていくと、そこにも小さな児童遊園があった。しかし、そこにもジャングルジムとか滑り台などの遊具は何一つおかれていなかった。何人かの子どもたちが、きゃっきゃっと言いながら走りまわっているだけであった。何本かの太いマロニエの木があるので、その間をあちこちと走りまわるのがおもしろいらしい。

ひょっと見ると、マロニエの大木に背をもたせて、小学校五、六年ぐらいの女の子が、ひとりは東を向き、ひとりは南に、ひとりは西に――といった具合に立っていた。何をしているのであろうか？　三人が話し合うのでもなく、動くでもなく、じっと立ったままであった。いったい、何をしているのであろうか？　私は見当もつかなかった。近づいていっても、私の方に関心を示すでもなく。ちょうど私がカメラを向けた時に、その中のふたりがちょっと顔を見合わせて、照れたようにかすかな笑いをうかべただけであった。そして、シャッターがおりると、再びもとの無表情な状態にもどって、そのままみじろぎもせずに立っているのであり、私には解釈がつかなかった。今でも、それが奇妙に思い出されるのである。

ブーローニュの森には、友人の自動車で行った。その西の端の、ちょうど森林が尽きるあたりに、国際児童センターがある。この国際児童センターでは、幾つかの大きな国際的な仕事がされているが、この名前を知ったのが十五年前、それも世界的に有名な小児科の教授デブレのおかげであった。実は、今でも不思議に思うのであるが、パリーの町中にある小児病院にまぎれ込んだことがある。その当時は、何でも見てやろう聞いてやろうという意気込みで、いろいろな施設に飛び込んだものであり、すげなく断わられたことも何度かあった。しかし、それにもくじけずに、ここぞと思う病院や施設にはいっていっては見学をさせてもらうことにした。その小児病院も、文献で名前を知っていたが、ちょうど通りすがりにその名前が門に掲げてあるのを見つけて、ふらっと飛び込んだのであった。

しかし、紹介状を持ってない。その場合には受付のあたりで何かよいチャンスをつかむよりほかはない。すでに午後で、受付もしまっており、そのあたりを行き交う医師も看護婦も気ぜわしい

動きを示していたので、つかまえるチャンスがない。私は、ただうろうろとしていたのである。

その時、つかつかと近寄ってきた年輩の男の人があった。白髪をまじえた平凡な顔立ちの人で、恐らく事務関係の人であろうと直観した。「何かご用ですか?」とその人は英語で私にたずねた。私は早速「ドイツに留学している日本人の小児科医であるが、パリーの子どもの施設を見学したいと思って、ここに訪ねてきたところなのです」と来意を告げたのである。そうすると、手招きするようにして、「私の部屋に来て下さい」といって、私を先導する。足早に歩くその老人のあとに小走りでついていくと、一室に招じ入れられた。その男の人は、たくさんの本の山に囲まれている机の前で、パタパタパタとタイプを打ち、たちまちに打ち終わると、ペンを取ってサインをし、白い封筒にそれを入れて、「ブローニュの森のはずれにある国際児童センターにいってごらんなさい」と、それを私に渡してくれたのである。私は「ありがとう、ありがとう」と何度か礼を述べてその病院を出たのであるが、病院を出て道を歩きながら、いったい誰の紹介であろうかと、その封筒から、四角に折りたたんだ書状を出してみると、何と、デブレ教授ではあるまいか!

デブレ教授といえば、デブレ首相の息子でもあり、国際的な視野から、フランスの子どもの保健や福祉のために非常に大きな貢献をすると共に、国際児童センターの設立のためにも大きな役割を演じた人であり、ヨーロッパの小児科医であれば、神さまのように思われている存在であった。あのデブレ教授が、今しがた会った人であるのか—と思うと、人間のめぐり合わせの不思議を感ずるとともに、デブレ教授の人格に触れることのできたことを、あらためて祝福したのである。

西ドイツに戻ってから医局の友人に話すと、デブレ教授の紹介状などはなかなかもらえない——ということであり、まだ若かった日本人の小児科医に示された好意を、あらためて感じたことであった。フランスにあまり好意をもっていない私の恩師ベンホルド・トムセン教授にこの話をした時にも、「あの人はすばらしい人だ」と手離しにほめたのであった。

このようなめぐり合わせから、私は、ブローニュの森と国際児童センターの印象は、忘れ得ぬものとなったのである。

(大妻女子大学児童学科教授)